

1. 献金 2, 111円 (小学校保護者・職員) 1, 000円 (高校職員)

※小学校は献金箱を作って毎月回収してくださっていた。

2. 献品 小学校保護者・職員多数、高校職員

米10K×1, 6K×1, 1.5K×1, 1K×2 海苔10枚×6 割り箸50膳×6 キッチンペーパー1巻  
ロールペーパー4 ふきんセット 靴6足 ズボン5本 上着5着

3. 夜回り 3月8日

昼間晴れた空に風の恐ろしく強い日だった。仙台でも瞬間風速30km以上だった。その名残がまだある中、元寺小路教会に7時に息子と到着した。キャンプの渡辺さんから「きょうはムスメはお休みですから」と言われた。息子が「きょうはスムーズにいくな」とボソリとつぶやき、思わずうんと言ってしまう。「でも、あの人を待っているおじさんたちもいると思うよ」なるほどそうかもしれない。出発19時45分3カ所追加してくれと言われ、息子と二人で早めに出た。勝山方面の**外記丁通公園**という小さな公園内にある土管の中で一人暮らしているとのこと。行って見ても人気がないので炊き出し案内とおにぎり、ゆで卵をビニール袋に入れて土管の中に置いてきた。次は法務局の裏手にある**跡付丁児童公園**という所。仙台市民10年めでいまだに道不案内な私は息子に地図を持ってもらったの運転。小さな公園奥のベンチに、確かに一人寝ていた。「こんばんは。正平協のタカハシといいます。炊き出しの案内に来ました。おむすびとゆで卵をどうぞ。それとこれ炊き出しの案内です。お寒くないですか?」「はい」「炊き出しにおいでになったことはありますか?」「いや」「五橋公園をご存じですか?」「はい」「今度の土曜日つまりしあさって、そこで12時からあったかい食べ物の配給と衣類の提供をしていますからよかったですぜひおいでになってください」「はい」「お寒いので気をつけて下さい」「はい」「おやすみなさい」「はい」次に車は西公園通りに出て仲の瀬橋を渡り、いつものスポーツセンター裏手にある路上のスペースに止める。そこから裏側を**国際センターの裏**に回り、外のトイレ近くの**橋の下にある洞窟**。そこに一人いるらしいとは以前に聞いていたので、いつも橋の上から大声で「こんばんは。夜回りです。炊き出しの案内に来ました。誰かおいでですか?」と声をかけるだけで、返事の無いのを確認して立ち去っていた場所だった。きょうは確かにいるから行ってほしいとのことだった。その話を聞いた時、すぐに息子に「きょうは探検があるぞ」と告げておいた。橋の脇から急な坂を息子とゆっくり下って行った。最近雨がなかったので斜面が乾いているとはいえ、滑った。大丈夫か?—大丈夫。ゆっくり来い。おとうさん大丈夫?うん。懐中電灯片手にそんなことを言い合いながら川縁まで降りていった。時刻は8時40分頃。誰かいるならもう戻って休んでいるはず。電灯で奥まで照らすと確かに洞窟のようなスペースが川沿いにあり、シートをかけた大きな荷物がはみ出して見えた。あった。あそこだ。行ってみるぞ。息子を促して先に立った。「こんばんは。こんばんは。夜回りです。炊き出しの案内に来ました。おいでですか?—こんばんは。こんばんは。夜回りです。」返事がない。「いないか、お休み中だ。案内を置いてゆこう。」「うん」おむすび類をセットにした袋をシートの上に置いて立ち帰ろうとした時、荷物の一番奥の端がむっくりと動いた。頭を起こしたのだった。私はややびっくりしたが、「起こしてすみません。炊き出しの案内に来ました。」「あっ、は、は、はい……。」「案内とおむすびここに置いておきますね。」「は、は、はい……」「それともお渡ししますか?」「い、い、いえ」「はい」早々に引き上げることにした。やすんでいた人は予期せぬ来訪者にうろたえた様子だった。(次回もここまで出向いて来るかどうかは本部での相談)斜面を登る帰り脚。「お父さん気をつけて」と後から息子の声。私は愚かなオヤジの常でこういうときに瞬間妻に息子を産んでもらったことを感謝した。

～親ばかな私事になる。息子はここまで平坦でなかった。言葉のおそい幼少時から始め、素直で人間関係に疎い性格から友人や先生とまでトラブルを繰り返し、親は何度も学校へ出向いた。高校は結局顔見知りのいない学校を選んだ。勉強は嫌いだが、根性はあったようで1年半新聞配達は続いている。ふつうなら4年かかるところの課程をめいっばい履修して2年間であと十数単位というところまで取った。それもたいしたものだと思う。イケメンの格好をしてアルバイト代を髪と服とダンスと歯の矯正にほとんどつぎ込んでしまっている。日本の大学にやっても仕方ないのでジャーナリストになりたいのなら中国の大学に行きなと言う母親の言にのったが、その前に1年間アメリカに行きたいと言いだし、英語と中国語ができれば何とか生きていこうという親の思いで、それもよかろうとなり、親はサラ金以外の借りられる借金は借り尽くすことにした。ところが今度は留学試験が落ちてばかりでさっぱり先へ進まない。母親はこれでも英語指導のプロで、中高生を指導して志望校に入れてきた。自分の子どもはままたらないもので、疲れるだけでものにならない。「でも僕はアメリカ行きたい」とこだわる。ボランティアスタッフのこわもておばさん方にはボクだのチビだの言われて本人は不満の様子。ただ親父としては周囲から教えられることも多かった。高校生にしては今時珍しお子さんですね。素直でとってもいい性格だね、と。これは先日まで家内が入院していたときに毎日通っていた息子のことを同室の人や看護婦たちが言った言葉。実際息子に教えられることも多くなってきた気がする。親が与える小遣いのないのを承知して新配以外のアルバイトも見つけてはこつこつ続け、そのお金を歯の矯正や服代、ダンスを習う費用や美容院代に惜しげをなく使う。人が見たら茶髪にヤンキーかイケメンスタイル。(今はそれも飽きて黒髪に)買い物でも連れて歩くところでもくっついてくる。もう単位のための活動はとっくに終わったのに、夜回りをしたいという親父のわがままにいやな顔をせずに付き合ってくれる息子に感謝しなければならない。そしてまた、自分らしく生きるとはどういうことかのヒントを息子から教わったのかもしれない。

**西公園** ここは煮炊き者が中心なので米とカセットボンベも置いて歩く。「クラシマさんお元気ですか?」「はい」旧図書館奥のテントハウスに独りで住んでいるおじいさんは出入り口の向こうからなかなかしゃれたランプを持ち出してきた。「それいいですね」「100円ショップなんです。中のも100円」ニコニコして説明した。「この建物はいつまで大丈夫なんでしょうね」「それが説明しに来る人によって違うんですよ。もうすぐ立ち退かないとだめだと言われたり、まだ大丈夫と言われたり……」「はい。

ともかくお大事に。お元気でいてください」「はい、ありがとうございます」陸橋下ハウスのオノさんには息子にあらかじめ言葉の用意を考えるように言っておいた。時計をくれたおじさんである。「ああ時計ですが、部屋に飾ってますんでありがとうございます」「壊れ物ですみませんでしたね」「いえ、ぜんぜん大丈夫です」オノさんがうれしげに笑った。息子エライと思う。橋下長屋のササキさんは風邪をひいたと言って出てこないで息子に届けさせた。若夫婦の奥さんは不在だったが、どうしたのか聞かなかった。勾当台公園 ミカサさん。「やあお待ちしてました」と言われた。こんなネアカな彼に出会ったのは初めて。「きょうは風が強くて大変だったでしょう？」そうそうと言いながら自分の荷物の山の周りにビニール傘を五つも六つも並べていて、まだ片付けの途中だった。10個ほどのライターまでベンチに並べてある。ロン毛に髭のホームレスといたら市内で彼を知らない人はいないにちがいない。ある日雨か何かの強い日にカラオケ店のソファーにひっくり返って寝ていたそうだが、店員が注意できずに困り果てた、というのは息子からきた話。ミカサさんはあくまで元気。好物の煙草を一本さしあげた。先月セクハラ言動をしたワタナベさん。きょうはミスメがいなくても意に介さない。「おむすびとゆで卵どうですか?」「やめんだ、やめんだ。そったな意味ねえごど。疲れるだけですよ」「味噌スープ飲みますか?」「はい」やけに返事がいい。それから手配師ではなく今度はこれ(人差し指で頬に線を一本引く)の紹介で仕事に行ってみたら、稼いでも金の払いは先送りされて結局また逃げてきた、と言う。きょうは最終16人と出会った。ムスメが先月から30人と申告していたのであまる計算だった。そこで今回も途中から煮炊きしていない人におむすび・ゆで卵を一人2個ずつさしあげた。終了22時25分。帰宅22時45分。息子は翌朝新配休み。ついでに親父の朝飯づくりもめでたくお休みでした。

1. 炊き出し 3月11日 9時~16時

天気は良好。最高の炊き出し日よりだった。おいでになった人76人(内女性3人)。ボランティア31人。仕事で息子にばかり頼んでいた私もこの日は生徒と連れて行った。畠山直子(3年)佐藤史絵・小幡彩・佐藤美由希(2年)以上4人。ドミニコの生徒を連れて行って感謝されないことがないのだが、この日は絶賛された。私の寝たあとの夜中に正平協会長の渡辺さんから改めてのお礼の電話が来た、と後で家内から聞いた。それはそうなるにちがいないと予想はしていた。運動部系の生徒たちなので元気がいい。返事がハキハキしている。休まずによく働く。明るくから場が華やく。ホームレスの親父たちに対しても臆することがない。受けがいい。ようするにととてもよかった。「また機会があったら来たいと思います」と反省会で感想を述べるので、連れて行った私がそれを打ち消すのに必死だった。

4年前にカトリック教会正平協で渡辺さんが炊き出しを初めて以来一緒に始めたスタッフたちが独自にNPO法人『萌友』を立ち上げてホームレスの生活支援活動をしている人もいる。その一人芳賀さんが私と一服しながら熱っぽく語った。日本の中高年の自殺者数が世界でもトップであること。年間4~5万といわれるが、不明者はその数に入っていないし、志願者や予備軍は後を絶たない。またこの社会の情勢からホームレスは益々増えてゆく。借金を抱えてどうしようもなくなっても相談するところはあるのだし、ホームレスになることも遁走したり自殺することもないのに、手だてを知らな過ぎる。またホームレスの問題も自殺者の問題も、それへの対策が『お金』で解決できると政府や世間では思われがちだがそうではない。食べるのも・着る物の点だけで言えば、日本のホームレスは恵まれている方だろう。重症なのは本人たちの孤独の問題であり、彼らは心の空白に一番苦しんでいる。私達はたくさんの支援に感謝しながらそれに取り組んでいかなければならない。……芳賀さんの話は尽きない。

## 炊き出しボランティアに参加して

2年 佐藤 美由希 私は初めてボランティアに参加しました。内容はホームレスの人に昼ご飯を用意したり、寄附された洋服などを差し上げることでした。私は午前中献品の衣類の仕分けを手伝いましたがその中には汚れた物や壊れた物も混じっているのを見て、「本当に人を助けるために寄附したの?」と思ってしまいました。寄附は要らない物をあげるのではなく人を助けるためにするものだといろんな人に気づいてほしいです。また反省会中に一つ疑問がわきました。この炊き出しはホームレスの人にとって良いことなのか、これに甘えてホームレスをやめないのではないか。ホームレスの人を助けるのならちゃんと就職作を見つける手伝いをした方が、人を救ってあげられるのかもしれない。炊き出しを必要としている人たちが早く自立できればよいと思いました。

2年 小幡 彩 先日炊き出しボランティアに参加しました。そこでは、初めてする作業ばかりでとても新鮮でした。なかでも私は、同じボランティアをしているおばさんたちの考え方に関心を持ちました。私はホームレスによい印象をもっておらず、日頃こんな人たちに炊き出しする意味はあるのかと思っていたのですが、おばさんたちは、ホームレスの人たちの自立を応援しているのよ。自立してゆく人を見ると私達のやっていることも無駄じゃないし、嬉しくなるの、と話してくれました。その他にも色々な話を聞きました。「ああこれがボランティアなんだ」私はおばさんたちの心の温かさに少しふれ、一つ学ぶことができました。自分のもっていた考えと違う考えを学ぶことは、人として成長するきっかけだと思います。機会があればまた参加したいです。

「自分さえよければそれでよい」社会の隅々にいたるまで、それこそ善意の活動にいたるまで浸透している世の中である。その中に、みずみずしい感受性をもった世代が入り込んでくれて、世の中の疑問と向き合う体験をしてくれることに何よりも本当に感謝したい。生徒が参加しそれを後押しして下さる方々にも深くお礼申し上げます。

次回の炊き出しは4月8日です。自立支援活動はすべてボランティアと献品などで成り立っています。よろしく願います。